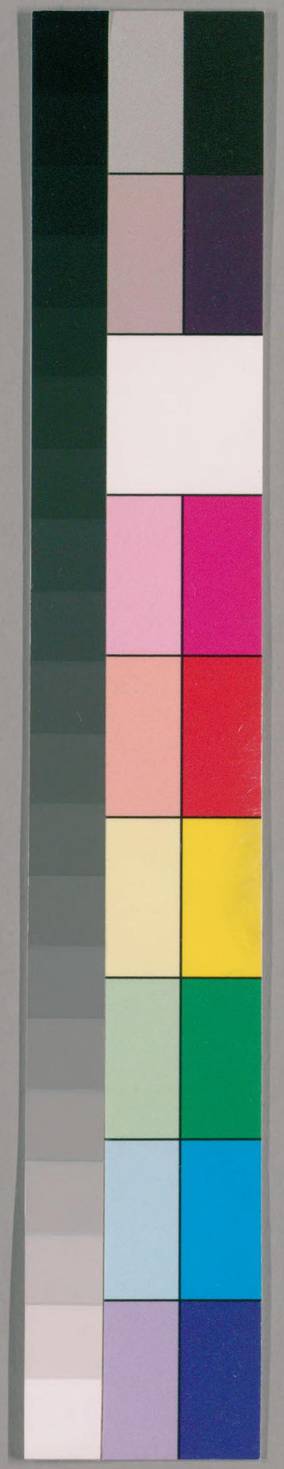
諸國里人談

特1
2349



国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349

ガラス使用

遠野市立博物館蔵書

諸國里人談巻之四

㊐水邊の部

○水の鞭　陸奥
○塩の井　出羽
○油池　武藏
○掘井　美濃
○念佛池　西国
○鳴松　

○裏見瀧　下野
○有馬毒水　摂津
○桜池　遠江

○龍池　相撲

○若狹井　奈良
○塩泉　下野
○油泉　美濃
○入梅井　摂津
○浮島　出羽
○津志瀧　安藝
○皷瀧　摂津
○高野毒水　紀伊

○竜穴　信濃

白井氏藏書

国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349
ガラス使用

㊅ 生植部

○曽根松　播磨
○十六掻　伊与
○唐倚松　近江
○枝分桧　安芸
○青葉楓　相模
○観音寺笹　三河
○臥竜梅　武蔵
○遊行柳　上野
○伐レ掻　京
○大蕃焦　堺
○八幡木　山城
○小町苧　出羽
○大槻　美濃
○八橋杜若　三河
○不断掻　伊勢
○八重掻　大和
○銭掛松　伊勢
○並渋桧　甲斐
○印杉　大和
○大竹　駿河
○西行掻　陸奥
○一夜杉　出羽
○物見松　近江
○宮城野萩　陸奥

㊆ 水邊の部

○水の雑

水い坎の窮なり其文横にして則ち三とす縦にして則ち二とす時い則ち其器い銚陽其用い銚陽上時ハ雨露霜雪なり下時ハ海河泉井なり流此寒濕い気の鍾不院異し其淡鹹苦い味の入不同しなり故い水に滲い萬化の源なり土い万物食い命脈なり本艸

水い火より柔にして水の患い火より慴し火い避へ水い避へ水い撲滅へ何ともする事なし男女陽の気性なり○茶経云山水を上とし江水を下とし井水を

菊岡沾凉著

井の水小さし（下略）○谷響集云波を盛に又盃ふみて
漆満るを溢れ波水同如くなるをお礙て復旋一升を
入一升の水に和るを其水増さに

○若狭井

南都東大寺二月堂の若狭井に常に水なく毎年二月
朔日より十四日迄て渋會あり干時幸僧加持して井に汲
ふ鍵くく三遍唱ふれば則水涌出るしかれども雲を籠
半玉を押事順例かくしたり其日若狭國鷲の深の淵の
水涸くしもおよぶ明神より告進せくて亦のごとし云物の
涸ぬ遠淡那の心の禁てあるの淵し
遠敷明神八条神　上の宮彦火火出見尊　下宮豊玉姫なり

特1
2349

往昔國主あまたをこころの其多かの淵に籠を荷さるを
その日二月堂の井に糠を出ることをよくるよし
二月堂八月素院と云本尊十一面観音長七寸の弘佛し
若狭の浦より出現し給ふ半玉の行ひ弘法大師の代
○塩井

陸奥國會津若松より茶沢への驛二十里餘
棒にて大桶とも擔ひ行ふ五里余にして
潮の泉大小二百あり大木を刻て樋のごとくにして
その泉をかくふに木筆を染るがごとし
焼てとるに一日に一升ばかりなり
塩屋七八十軒皆塩を焼て売とぞ
東四日路より近きの地にて唐雲南省四川省よりの海塩

れそし○夏は潮を浴て乾き冬は湯を浴て乾く故に名とす塩の出ること焼る塩のごとし又浴衣を貸す

○塩泉

下野国日光山の小七八里うしろに栗山と云温泉あり此のみづおの湧出る処にて釜を置てその傍に会釈よつて人を置焼こと塩のごとし

この中にて湯あつきは四十度ばかりありぬるきは二十度ばかりあり此の泉の効能は諸病に験ありと云

○油が池

越後国村上の近辺の山中黒川村高田領より方十間余の池あり水よりも油浮出て土人是を掬ひ取て薬に用ゆ

油泉

越後国村上の近辺の山中黒川村より方十間余の池あり水よりも油浮出て土人是を掬ひ取て薬に用ゆ

○天智帝御宇に越州献可代油嶺之水と云

○又土中より掘出すを菊ノ伊賀油と云

あらた木の柱ある物の二三尺ほり入て掘出し或人越後にて掘出すを見しに木の柱なくなる時は上段の炭より堅しと云

○油泉

英法国谷汲の開基豊然上人延暦年中桑劉の時その地を平均ならしめ一つの巌を磐石の中より油湧出ると云

国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349　ガラス使用

麝香猫油能治久年瘡腫之事
おくると剛油漏ることなし一家の秘
十一面観音を安置せりまた其長五尺の像
帝その霊験をきこしめされ額を
徴しきなれとも其家の夢想を焼をはらひあり

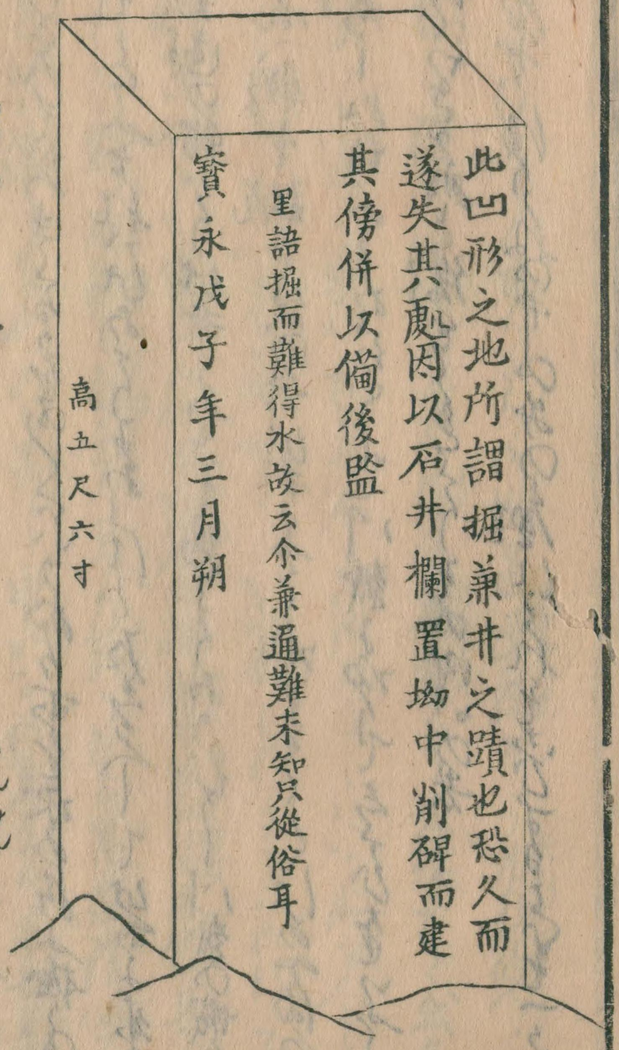
○掘抜井

武蔵国入間郡掘金村小名
窪の不掘抜の井の跡なり方六尺ばかりの石を畳て井
桁とし未だ埋らて苔むし傍に碑ありもろこし越
乃国のものの建しとも千載むなしくほりぬきの井もあるものをとも
　　俊成

此凹形之地所謂掘抜井之蹟也恐久而
遂失其處因以石井欄置埒中削碑而建
其傍併以備後監

里語掘而難得水故云仝兼通難未知只從俗耳

寶永戊子年三月朔



掘抜井と称する古井を洗用掘抜井と
定る五六町南に方二十間ばかり掘ぬきの
井の跡と云又七女郷田或入曽里
高くして水を得ること能わるとて掘ぬきの里語ありて云伝

を遠くうるし掘金のかれなんとを
書ありおこしの水を失るなり○享保九辰の夏三縁山増上寺の
塔中浄光院門泉院の退院むさしの
湧るよし奉行所へ願ひ出ければ
杖のむきをひてかつきるかをのくいふ
をこゝろみんとてかれありまほしきこと
こゝを実迹の地なりと井よりつきそめ
鍬金鳧を掘を彼の老ひ井をさ
ひ井底一ぬりおとしもらしつゝ
きとのくつきるまでとうとうその時かの老
氏翁ほうびの井のみの感
応をたゝするこゝを

と称しひそくなるこゝろにて
感応給ひく随金佛一てぐ像の
而よ仏ありとかゝる事をきゝ今
感応こゝろ事くへすてありかく
きしに、の如き亡霊なんしなん
事なき則ち疫病を払ひ吊ひある
こゝを墓とそ今あり去一申いその年より十七年に
あらん事忘の吊ひあるし

○八　梅井

桜津国矢田郡丹生庄原野村栗花落古老の曰
井わり深三尺深一尺ある不書いれ入梅

入て水湧のごとし入梅の立春の後九百三十五日にあたる
日俗栢槲花ほころびて雨ふり深山の花徐落て本草梅黄の涙
をそゝぎ入梅のごとく雨ふりしたゝり始めて細い真勝とよぶ撫佩左大臣の
詩にて累代くりかへしきたるし豊成の娘白玉姫の中将姫の
姉なり中夏のおろし池よりおのれて蓮を生ずるに大小六十五の浮嶋あり一丈三尺ばかりの
をそゝぐ雑木天を蓋ふし其外よりの水湧出ず今に洋葉
の候をまつごとし

○念佛池

美濃国谷汲と坂下との間にある小さき池あり渡せる橋を会
佛橋とよぶ池の中に石塔あり俗人の言るとは昔
往来の人橋のごとくつらなりて石塔よむらひを御ふれを
とく沸くごとく湧ふくに泡だゝしきものなり会仏を小
さきつゝみ池之責会佛をやせたるものゝ泡多くこと
なるよりてなづけ佛池とよぶ

○浮嶋

出羽国最上郡羽黒山の神仏
大小六十五の浮嶋あり一丈三尺ばかりの
のごとくにして大き風落を葺列
らるゝのごとくなり池のまわりに動ぐる小き嶋に蔭苔生さう
雪を戴原始と号するし六十余の
池を副てあり号松栢森あり松栢森
秋ふそれ西より湧る湧る湧る湧

かまあり時くして二十ばかり三十ばかり
蜜と吹はしらつきの水よ映じて
汗ある時笑づる程の露き事
岩る事なし新敷人の
遊ぶ水を考へ吉山
○鴻の遊

西国の海上に廻私通神掛
事多く漁父のみな心ある辺きる一
立ほとをかくよ人あまりこれ
よ事ありのるひら放ちかる
止て俗ハ称く助くなる海系し

国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349
ガラス使用

鴻の巣ひとそうび事多くいまそかりしとなん

○津志滝

安藝國山縣郡澤志滝の靈驗の觀音あり滝の下に潜みそこより出るといおり滝の浪花をなし奇觀の人傍にあふ事なしふだらくさんぼう水一滴も落ちそのうえの滝の下を潜り出るもし定大悪の佛力奇なりとぞ一念被の股に波浪不能没ともある則ち是なり

○裏見滝

下野國日光山に四十八滝あり裏見の滝大石の崖に

出て岩窟あり高一丈あまり深二丈三尺ばかり三筋川の堰となり老女の石像ありおもとより滝の裏をくぐる高二丈ばかり上より石像の不動明王あり世をのがれ天狗のつれ給ふ事ならず不浄の人若は参詣せば忽悩て敬せしとぞ

○蜘蛛滝　有明梯　屏風岩　ふぢ水

相模國有馬郡陽岸の南八町ばかりに滝あり水の落る高サ拾八間ばかりそれより流れ出る水の方今の湯本の湯なり有明梯と云ふ石梯あり○屏風岩十八町の間あり絶壁の上より滝せをとし人々参詣するもの多し○ふぢ水と云ふ水あり秀吉公有馬入湯の時茶の湯の水

国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349　ガラス使用

○有馬毒水

湯本の町立所より北へ池ありけるに
雪ふる時は毒ありて鳥獣死す名ある虫ひとつもなし
虫の形狐ともいへず谷と地獄谷とよべり

○高野毒水

紀州高野山より玉川へ谷ありけるに毒ありて魚
ともに死す旅人のうまの口のあたりのみ
ふれても腐れ人旅人の

○掬う池

伽藍阿闍梨皇圓が源空上人の頂
の頭一山の雄才なりける皇圓自養寿の蛇身に
なりて修勤の出世を侍へ一遠別掬ふ池
出よと修人と呪詛の時は池の水大きに湧く
皇圓入寂と同時なりとぞ今に至て雨色よく錆たる池
にてありと云り池も遠く回笠原庄掬村に男池女池とて
方五間ばかりの池二ツあり掬ふ池の社の半頭天王なり
毎年八月彼岸の中日午の刻に半切桶に赤飯を盛りて供
の達者なるものあまたを押分池の端に置
甚多の声にて池の底にさけぶこと三度
水面も沸ひしと仮寝にその赦免ありける
五ツ半ごろに婚成りける

○龍池

捐別にて落雷のひとつの池あり海際なる里へ

浪ぞこの穴へ入てそのあな底に
○此あたりに福石といふありひろさ
指わたし三尺ばかり福石ともいふ又後より出るあり飛石ともいふ

○龍穴

信州善光寺の本堂の内陣の中央に
ありて本尊の宝前より甚深の階
ありて階の下に大なる穴ありて
此川水流れ入て穴へ入ると云
實偽ともに知ものなし
をのくその奥をさぐらんと雖大
ぬるの時は此穴へ入て死ると
ころまで行て帰ることなし
怖しかりければ誰もさぐりみる
ものなし

㊇生植部

○曽根の松

播磨国印南郡曽根村にあり天満宮の神木
お供の散公孫樹へ記さる此松枯ぬれば
小松を植つぎ非正栄枯をくりかへして今枝葉
ひろごりて一丈三尺　周り一丈八尺　乾より巽へ指て　七丈
臥り坤へ延り　十一丈　這枝毎に枝をだし甚数百五十筆
伊勢国白子の孝子村観音寺の堂の前に一本の榎あり　四時
に花開り實のなるの花のさくよりおそく五十日の

元常の往生南寺八る年觀音と称し靈験世に
あるゆゑ諸人を遣而よ安置をまし参詣
ひきもきらず村一ていふる女五月第九日
うりてかへる

○十六摑

伊予國和気山越村ろ恩寺の林の中に一本のくろあり
毎年正月十六日に新穀をうりて其
価實ろ摑をうへて我ろ
及ぶ者なし外にはしろ
とあよむりて能渡を知ることなし
ろ堂ニ月十六日しそれろし

○八重摑

南都東圀堂の前よ弘ある八重もくろあり一條院
の御時上東門院ひさくを摑庭に植し載ありて
奥の福寺の別當に命し給へ別當命を奉
ゆゑ福寺の靈木し何ぞ他へ遣
やと澤潟ゆゑ后の事ゆゑ
いかゞそのことをし死を
業ゆゑ歟一ぢび今ろ摑と種へ
且漸ふ多くて他よう
寺領の在を賜ふ年毎の
ちむしむ村を花摑庄と號ける

国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349
ガラス使用

こと淺ましさこそを平家物
○唐橋松
近江國栗太郡唐橋の松い一堂一葉しなさゝかなる
世よりも古木なり淀水尾院住
後七人の志のかしこきを
志賀濱に三井寺より堀なのるし唐橋花園まで
○撰掛松
勢州鹿田と採なのる名所國野にあり
人は聲のよきよし傳て此松ふい行程のことある里人
ひゞて十日ゐ廿日七日ゐ長野の松とゝもよく
文の松をし松ゝえよかけて旅
太神宮を祈て

他の人彼松を見ゝよ蛇の蜻
被ての故つゝ
又奉ゝしゝを見ゝそかけ
ゐゝてゐゝ云り
○枝分桃
安藝國新庄村ゝ佐東村の界に大なる桃一樹あり
面の新庄ゐ佐東ゐゝゝ桃佐東のゝゝ
桃の皆ゝく新庄のゝゝ
弘法大師佐東ゝ桃を
ゝゝよゐあゝゝ云り新庄
ゝゝゝ故ゝ

○玄猿槌

甲斐國二の宮の社地に大木の槌あり猿なくころ多くこれを以て殺すと傳ふ

○青葉楓

武藏國金沢補名寺の堂ひろくいとうつくしきものなり本の楓あり實の熟するころ紅葉せしを今汲よりこの寺にうつしうゑたりと云

詩潤　西湖梅　墨梅　探梅

書賢參拾　蛇混拍　一ノ松　青葉楓　筆ニ

○印ノ打

和州三輪に印打とて年ごとに相傳の伊勢國奄藝郡の猟人

黒き毛にて一ツ宛ほどく渡世とせり

奈良の春日の社の前に三輪のごとく杉を門

に植ゑ並べたる處を求めて三人向ひ

神とする社の前に勝列童藝郡の人多く集ひ

いひ傳へたりと云り又日本記に本記の抜あり

○觀音寺筆

三河國保飯郡小松原觀音寺の本尊馬頭觀音

行基菩薩の作し毎年二月初午に參詣の人

限なく滑し馬の形を厩に彫つけ又日本の畫

何の年とも忘れ堂の前を渡る私に堂の前を

時恍として敢て渡ることを為ざるの如し

国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349　ガラス使用

○大竹

駿河国府中の寺にて、その縁年中の須一夜の中に生ひなりて、あまたの竹、生ひ繁りて、蔽ひ、一月余も通り難く、三人囲りもあり、末葉のそよぎ、人の声のごとく聞ゆ。一年許り番を置きしに、住僧の云ふ様、竹程小竹ありて、ひそかに伐りくづさんとす。斧の入るや否や、血流れ出づ。驚きて、伐るを止めぬ。今に、その竹の残りて、枯れ朽ちたる、数多あり。

○臥龍梅

武蔵国葛飾郡亀戸村にあり梅所の
説の数多くその條の末地中に入て
這ふこと二十余丈小枝ところ〴〵
苔むして四方に薫葉大なる桃の
ごとし味ひ酸し毒馬に置
○八幡木

土佐国野根山街道の傍に檜の株あり
幹と枝葉禁の字ほど利村の八幡の社なり
屋根板なり悪成就にて俗よく
祟り社の方四五間なり今に夜

○西行桜

山城国伏見法輪寺の南に檜元菴とて有り西行上人の
菴室の旧地なり桜大なる桜一樹あり
つねに雲のごとくあれど二月の中旬を
て開花と号し後の雨ふりて散ぬ
把にして和歌を乗ーなを乗
家僕も桑ふーなお
川の源ふかく船よく乗人多くして船賃一倍
ふかの源ふかく船よく乗人多くして船賃一倍
そして遊ぶ一人の船賃大ほど
と雨ふりの日を乗ふ血流ふ

なくして私うち云ん西住ひとりをえて恵照しこれ著して悪
乃金ごろみ西行ふたゝび繋ぎ一金都をつゞるうち都のふ
とくなる事をうる何そよまをまねんばせ給ふ美箇うるへ
油ひ付ふ一ふしとて西住を高卿へ
ひなそく根いうまつうんふもくし

○越前柳

下野国芦野のまち長列ノ果柳のもと
まち傍ひ社あり温泉大明神と
たのへの清き流れ称佐まし
比叡ふうの名木なし西行柳と
称ひ新の霊験上人ふ

私云
九十九とらつるを小所のものにいたる深草の少将こゝに来りて
一夜世にひとくさりを文をこゝにせたるを
はくもこのかうこゝにひとくさりを文をこゝにせたるを
行ものよりかつく小所のものにいたるを深草九十九様を
はくるるものいはゝきこゝろこゝろこゝろこゝろ
九十九のこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
〇一夜松

同国同郡陰田より壹ぐりと書ける板のそこにあり二輪
の神の中一ありけるの秋一本陰
元一万年ありの松。擬ねそうこゝろこゝろ
なしなし他事なしなしきの松こゝろ

〇伐擬

京都東福寺の北殿司い名画なり
昔おのるる一日北の志を謂しめ望ひ余あるを剛達せんとし
北の日賊賢官辞えようと望なり
りうれんとと今一の私あり近来東福寺の元信ゆく模精
そ載る事をなん後世もてこゝろ精舎愛して遊嘉よ
壊こゝろなんまこゝろ勤くおしこゝろ
伐んとし義持公大きよ感一伐
伐ゝむ今ゐむて事中に採取
〇大擬

昔行天皇十八年に筑紫の道の後の国よりあるの神に倒

まてる木あり長九百七十丈百尋その枝を洛く往来の人天を閉てて云延仰の末て一の老木ありて曰く我は旭の暉にあくがれていにしへ阿蘇のこをかくしき日本記

○又昔近江国栗本郡に大なる拔の木あり其圍五百餘あり枝葉繁茂て甚奇異朝ごとに丹波にまで夕ごとに伊勢国にさしかけて潤賀栗本甲賀三郡の蔭を覆ひ其日影あるところ百姓ども歎てい田畑の作物繁茂せず掃守宿禰移よ命しむるに書て後世を奏しよんて掃守宿禰移よ命しむるに書て後世を戒しむ

○物見松

筑後の出垂井と赤坂のさもの松

あり赤坂の宿より垂井へ行程半ばに過ぬ松なり

○妙國寺の藤鉄

泉州堺妙國寺に大樹の藤あり高一丈三尺叢生して十三本周り拾二丈比類なき奇木なり

○八橋杜若

三河国碧海郡八橋山と号る寺の杜ありいにしへ名草

特1
2349

諸国里人談 五

菊岡沾凉 著

森町

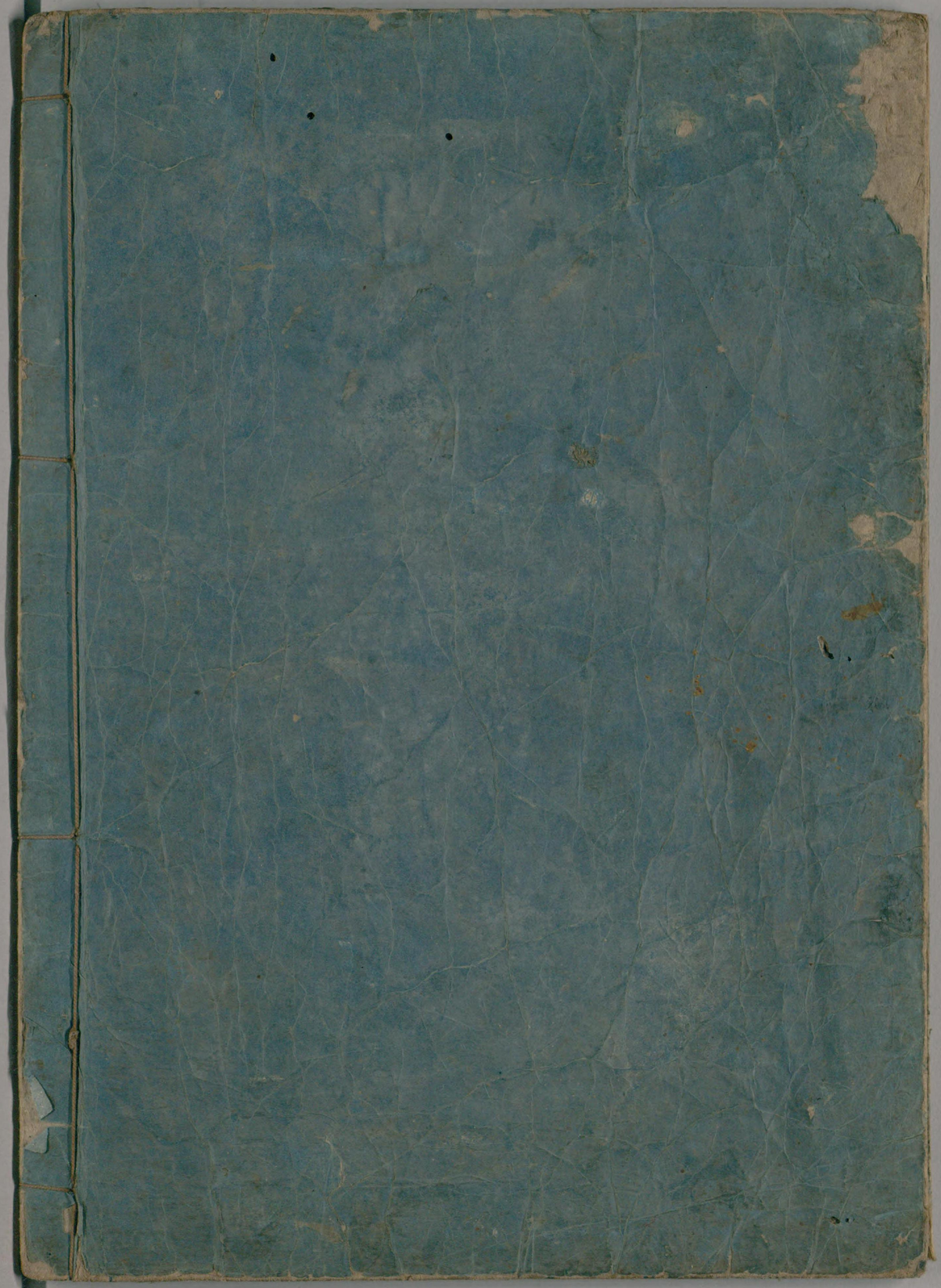
なりけり杜多い四龍にして燈籠の蝋で
とらへ修事らし燈ゐ流の事にわらんそれ飛のみし

○文機野 萩

奥列文隊野の萩い本萩ふく薄本のみく弱事の出来萩
よりて異にして下らなくよ作る本らし又事あく本萩とふい撫い
出る萩生てその萩いそなくの事のわくいかろくしと云ふのし
多脇ゆく事わく本萩多事ふ家をまんことを云そまて
むくある仲とふ人みらのくの後なり出る仲とふ人みらのくの後
はる村多脇ゆの萩を実据十二合に入て参りけもしと
赤入の自二條右ふよ人なりくあまり車あ角ふと云ふくふと

里人談四之終

国立国会図書館　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『諸国里人談 5巻』 請求記号 特1-2349

ガラス使用